

第 11 回研究奨励賞受賞作講評

川名雄一郎『社会体の生理学——J・S・ミルと商業社会の科学』

京都大学学術出版会，2012 年

第 11 回経済学史学会研究奨励賞の受賞作に，川名雄一郎『社会体の生理学——J・S・ミルと商業社会の科学』（京都大学学術出版会，2012 年）が決まった。

本書は著者が University College London に提出した Ph. D. 論文を基に加筆修正を加えたものである。全 9 章からなり，序論である第 1 章で目的と構成を述べたのち，第 2 章では 19 世紀初頭の科学としてミルに多大な影響を与えたデュガルド・ステュアート，サン=シモンをとりあげる。第 3 章からは本格的な分析に入り，トクヴィルとの交流を発展させたアメリカ論（第 3 章），商業社会の分析という課題の設定から，そのための方法論を彫琢していく過程をたどる（第 4-8 章）。最後に，異なる国民へのエソロジーの応用として，アイルランド問題（第 9 章）が取り上げられている（本書の内容については，本誌 55 巻 2 号，126-127 頁の書評でも紹介されている）。

すでにミルについての研究は内外において汗牛充棟である。その中でも本書の特色は以下の点に求められる。第一に，ミルの研究と言えば従来特に日本においては経済学者としての側面に注目したものが多かった。これに対して著者はミルが「社会の科学者」として，未完に終わったプロジェクトを構想したという視点のもと（本書，4 頁），ミルの思想の多様なコンテクストを明らかにしている。第二に，その未完のプロジェクトの軸として，『論理学体系』を中心にミルの方法論の解明に比重を割いている。第三に，文献の渉猟と収集は徹底しており，ベンサム・プロジェクト，功利主義研究の拠点に長期滞在していた利点を最大限に生かして，膨大な一次・二次文献を渉猟し，手際よく整理している。

反面，本書には以下のような課題がある。第一に，多様なコンテクストの中でのミルをとりあげた反面，全体としてのミルの位置づけがやや統一した像を結んでいないうらみがある。これはミルのプロジェクトが未完であり，失敗に終わったものという評価とも関連するが，著者の整理の仕方にも課題が残されている。たとえば，本題は扉頁で著者が引用しているミル自身の言葉に由来するものの，その正確な意味は本書では明らかにされていない。また，本題でいう「社会体

の生理学」と副題でいう「商業社会の科学」は同じものなのか、異なる二つの軸なのか、それとも互いに重なり合いながらもミルの思想において歴史的に発展してきたものなのか。第二に、『論理学体系』を一つの軸にしてミルの社会科学方法論を中心的に考察したのは貢献ではあるものの、『経済学試論集』の経済学的論考、『経済学原理』をはじめ、経済学に関わる論考は意図的に議論の射程外に置かれており、経済学者ミルを扱う視点が逆に弱くなっている。「社会の科学者としてのミル」と経済学者ミルとの関連に言及があればよかったと考えられる。第三に、それぞれの論考の水準は高いものの、第3章のアメリカ論、第9章のアイランド論など、着目は重要ながら本書全体での位置づけがやや不明確なところがある。

以上のような課題はあるものの、本書がJ. S. ミル研究、ことに初期ミル研究において今後参照されるべき重要文献であることは間違いなく、研究奨励賞にふさわしいと考える。最後に、本書の来歴からしても英語版の刊行を著者には期待したい。

2014年5月24日

経済学史学会
学会賞審査委員会